

イスラエル建国めぐる「内戦期」
—「共存」への模索— 中東百年紛争史(第3回)
In Search for Coexistence Between Israel and Palestine
— The Third Series —

森戸幸次

要約

イスラエル建国をめぐる内戦期(1947年11月29日～48年5月14日)にパレスチナ「分割」の国連採決を受け入れてユダヤ国家誕生への道を突き進むシオニスト側とこれを阻止して徹底抗戦するアラブ人側が流血の内乱に突入、48年5月のイスラエル独立宣言とともに、エジプトなどアラブ諸国との本格的な中東戦争へと発展した。本稿では、こうした中東紛争の対立の根深さを、パレスチナの名門フセイニ家の苦闘の歴史から探ってみる。

キーワード

聖地分割、アラブ最高委員会、カデル・フセイニ、インティファダ、民族統一指導部

第5章 遥かなる道標 父から子へ受け継がれる戦い

「西欧文明に対して歴史の審判がどのように下されるにせよ、近代の西欧人は二つの大罪を犯し、決して拭い去ることのできない汚点を残した。ひとつは、アフリカから黒人奴隷を労働力として船積みして新世界の農園に送り出したことだが、もうひとつは、欧州に住むディアスポラ(離散)のユダヤ人を大虐殺(ホロコースト)したことである」(アノルド・トインビー)¹⁾

第5章 遥かなる道標
父から子へ受け継がれる戦い

70年後のカステルを訪ねて

エルサレムから西へ約10キロ離れたところに、ローマ時代の要塞カステル城の遺跡が残っている。エルサレムへ向かう高速道路がつづら折りの山間部に入ると、左手に小高い

丘陵が見え始める。今は「カステル公園」と名付けられた丘の頂上には大きな岩の城趾が残っており、赤茶けた岩肌の中から軍用車両の残骸が一部むきだしのまま、かつての激しい戦場をしのばせている。城趾の中央に黒い大理石造りの石碑が建てられ、碑文はヘブライ語と英語で次のように記されている。

・・・1948年3月末、エルサレムの攻防戦は重大な局面を迎えていた。エルサレムへ補給物資を運ぶ車両の護衛作戦は失敗に帰し、旧市街のユダヤ人地区は孤立無援の中、完全に孤立状態に陥った・・・。

1947年、中東を悲劇の底に突き落とす歴史の舞台がセットされた。この年に英国がパレスチナの委任統治を放棄し、これを受けて国連が「パレスチナ分割」を採択、パレスチナ全体(26323平方キロ)の42%に当たる1156平方キロが「アラブ国家」に、56%に当たる

¹⁾ ARNOLD J. TOINBEE, *A STUDY OF HISTORY*, ABRIDGEMENT OF VOLUMES VII-X, p171.

14900平方キロが「ユダヤ国家」に割り当てられて（その他、エルサレムの国際管理地区=など）、ユダヤ移民は1947年までに60万人を超える〈移民ラッシュ〉が続いていた。パレスチナに住むアラブ人側は危機感を深め、ユダヤ移民との間で内戦が始まった。しかし、パレスチナの歴史はイスラエルの独立へ向けて大きく動き出していた。ユダヤ、パレスチナ双方はイスラエルの運命を決するエルサレムの攻防をめぐる熾烈な戦いを演じ、この戦いの帰趨は戦略的要衝カステルが握っていた。

1948年4月5日、月曜日。激戦の火蓋が切られた。前日から、アラブ側が増援部隊を送り込み、ハガナ（現イスラエル国防軍の前身、「防衛」の意味）もカステルに強力な陣地を構築、カステルはエルサレムへの入り口にある小さなアラブ人の村だが、イスラエル側がエルサレムのユダヤ人地区への補給ルートに使う幹線道路を見下ろす要衝に位置しており、ユダヤ側にとっては、補給ラインを確保するには、この戦略的要衝の制圧が不可欠だった。

アラブ側を率いたのが当時40歳のエルサレム地域軍最高司令官アブデル・カデル・フセイニ。1936年に「アラブの蜂起」で決起したアラブ住民の統一政治組織「アラブ最高委員会」傘下にある「アル・ジハード・アル・ムカッダス」というゲリラ部隊（総兵力2千人）を指揮し、パレスチナ・アラブの傑出した指導者としてその名は若いときからパレスチナに轟いていた。父親のムーサ・カーセムも「アラブの蜂起」（1936年-39年）を指導し、パレスチナゲリラの第一号といわれた。カイロのアメリカン大学で化学や文学を学び、一時はジャーナリストとして働いていたが、その後、「アラブの蜂起」に参加、西岸ヘブロンでゲリラ部隊を率い、ベツレヘムでの衝突で負傷した。英委任当局から彼の首に懸賞金2百パレスチナポンド（当時の平均月収約50ポンド）がかけられたが、神出鬼没で「捕まえる

のは至難の業」（英当局）と言われていた。その後、イラクに逃亡、バグダッドに亡命中の1940年に長男ファイサルをもうけた。カデル一家は32年に英国委任統治からイラクが独立した後、しばらくバグダッドに移り住んでいた。カデルは41年にラシド・アリの反乱に参加、さらにサウジアラビアに逃げたあと、エジプトに入った。しかし、46年8月、エジプトから追放されたため、今度はシリアに赴いた。同年11月に一部のパレスチナゲリラたちはパレスチナへの帰還を許されたが、カデルは除外された。このため、47年、仲間のゲリラたちを引き連れて非合法にパレスチナに潜入、再び委任統治国の英国とシオニズムに対する闘争を展開、パレスチナの独立運動に邁進した。48年3月、カデルは声明を発表し、「われわれの闘争はわれわれのアスピレーション（パレスチナ独立）が達成されるまで続くだろう。私はアラブ最高委員会から新たな指示を受け取るまで戦いを止めない」と宣言した。4月1日、カデルはパレスチナを離れ、アラブ最高委員会と協議するためダマスカスに入った。従兄弟のアミン・フセイニ議長に戦闘資金や武器補給を求めるためだった。5日、エルサレム西方9キロのユダヤ人アルザ、モツアカデルが率いるゲリラ部隊から攻撃を受けた。アラブ側は兵力を増強し、ユダヤ側の陣地に対して果敢な攻撃を繰り返し、各地で激戦が展開された。

カデルは7日夜からこのカノーテル攻撃の陣頭指揮に当たっていた。激しい戦闘が続き、カノーテルは何度も主を変えた。一瞬の休息すらなり戦闘が続く中、ユダヤ側はついに後退を余儀なくされた。小隊長シモン・アルファンは「兵隊は全員後退、指揮官は全員後退を援護せよ」と命じた。指揮官クラスの中で生き残った者は分隊長一人だけだった。カステルの戦いで敗れば、ユダヤ側のエルサレム救援は絶望的となる。「エルサレムへの給電は一日数時間に低下し、給水ポンプはアラブ

2) Chaim Herzog, *The Arab-Israeli Wars, War and Peace in the Middle East, From the War of Independence through Lebanon*, Random House New

York, 1982, 1Confrontation in Palestine, pp.27-28, 滝川義人訳『図解中東戦争イスラエル建国からレバノン侵攻まで』、原書房、1985年。

人の手で閉鎖された。新市街では飢餓が広がり、住民は渇きに苦しんだ。電気がないので夜は真っ暗となる。市は一日24時間ひっきりなしに砲撃された。もちろん店には食品など見当たらない。住民は地下生活あるいは壕生活を余儀なくされた。水が欠乏し、衛生状態は悪化する一方だ。補給は底をついていた。包囲が解かれなければ、人間の忍耐の限界点をやがて迎えるとの危機感が広まっていた²⁾。

ところが、状況が一変した。戦闘中にカデルが突然戦死を遂げたのだ。彼の率いるゲリラ部隊はイラク軍の増援を得て、カステル山のユダヤ人拠点を攻撃中だった。副官のカメル・アラカトも負傷した。カステルの戦いに参加した元イスラエル兵ヨラム・カニウクは証言する。

「4月8日のその日、私はほかの若いイスラエル兵とともにカデル・フセイニに出会いました。肩から弾倉帯を十字に吊るして威風堂々たる勇壮な姿でした。不意の遭遇に私は驚き、身体が震えた。私はとっさに彼を狙って撃った。が、当たらなかった。隣にいた私の戦友が旨く撃ち、カデルは倒れた。彼のポケットにあった持ち物を調べたら、あのパレスチナの英雄であることが確認されたのです」(Line Reid Banks, *Torn Country—An Oral History of the Israeli War of Independence* などから引用)³⁾。

カデル・フセイニの残された長男ファイサル・フセイニは語る。

「私の父を撃って倒した男もこの数時間後には戦死したと聞いています。当時、父はエルサレムへの道を制してエルサレム全域を攻略しようとしていたのです。これに対し、シオスト側はアラブ側に包囲されていたエルサ

レムを救うために聖都への道を切り開こうと必死で、カステルに大部隊を投入、連日熾烈な戦いが続いていたのです」(1989年7月6日、9日、東エルサレム市内での筆者とのインタビュー)。

その後、カステルの戦いから41年後、このカデル・フセイニを撃ったイスラエル兵と彼の遺子ファイサル・フセイニはニューヨークで運命的な出会いを体験する。1989年3月、コロンビア大学主催の中東和平国際シンポジウムにイスラエル、パレスチナ双方の代表として招かれたのを機にこの二人の対話が実現したのだ。

カニウク - 「父親が死んだ時、ファイサルはわずか8歳でした。幼い胸の中に父親の面影を残しながら成長し、父を殺したユダヤ人への怒り、憎悪、不信が彼の性格を形成していったに違いないと思います。彼にとっては、父親はパレスチナの英雄だが、私にとっては、自分を殺しに来た一人の敵兵にしかなったのです。カステルで私の戦友も40人が尊い命を落としています。死体が累々と横たわり、その上空にはエサを漁る秃鷹が飛翔し、王のように荘厳に静かに風の中を漂っていました。秃鷹どもはユダヤ人の血もアラブ人の血も分け隔てることなく、あまりに超然とした様子だったので、その場にいた私たちユダヤ人やパレスチナ人たちはこの秃鷹どもの空恐ろしい聖餐に供されているような幻想に囚われました。そこで、私はこの情景を遺子ファイサルに語りました」。

ファイサル - 「私は父を撃ったこの男に恨みとか恩讐を抱いていません。なぜなら私は、カデルを自分の父親としてではなく、パレスチナの戦士として見ており、父は戦士として志半ばで倒れていったからです。カステルの

3) イスラエル建国闘争を率いた初代首相デビッド・ベン・グリオンは当時の日記にこう記している。「アブデル・カデルがカステルで殺された。われわれはカステルを奪回した。われわれはカステルで26人失った。カデルはわが小隊が殺した。カデルは4人を率いてわれわれの陣地にやって来た。直ちに4人のうち3人を射殺した。カデルだけが残った。彼は両手をあげて命を乞

うた。しかし、彼が何者かを知らずに射殺した。身分証明書をチェックして初めてだれをシャツしたのか分かった」(4月14日付日記)、David Ben-gurion, *ISRAEL, A Personal History*, American Israel Publishing Co.Ltd., Tel Aviv, 1971. 中谷和男・入沢邦雄訳『ユダヤ人はなぜ国を創ったのか—イスラエル国家誕生の記録』、サイマル出版会、1973年。

戦いでは多数のイスラエル人が倒れ、またパレスチナ側も多数が死んで行きました。現在、私たちパレスチナ人はパレスチナ問題の公正な解決の道を探るため、多くのイスラエル人と会い、話し合いを進めています。過去、誰が誰を殺したとかはもはや問題ではありません。だから私も父を殺したイスラエル人に特別な感情は抱いていません。父はパレスチナ戦士として倒れたのであり、私と同じ気持ちだと思います。父はこの戦いで死んだ一人に過ぎません。だから、私は、この戦いに参加した人々とだれとでも握手できます。私としては、現在、どのような地位にあるイスラエル人とでも、たとえ平和を望まない人とでも話し合う用意があります。

カニウク - 「ファイサルと私は、カステルで起きたことの象徴的な意味を理解し合った。つまり、私たちは、同じ目標に向かって歩んでいるという事実を理解するには長い時間がかかったということだった。アラブ側はイスラエルを傷つけることはできても、イスラエルに勝つことはできないし、イスラエル側はなんびとといえども永遠に抑圧され続けることはあり得ない、という事実にお互いに気づいたのです。ファイサルと私は、イスラエル国家とパレスチナ国家が共存するという思想故曾我、60年以上に及ぶ戦争の継続よりも、双方に生存の機会を作り出すものであるという事実を理解し合ったのです。

われわれは、過去の記憶に任せて政治的行動をしてはならない。過去は忘れなければならない。お互いが衝突する時、双方の夢は妥協に道を譲らなければなりません。ファイサルと私は、これから自分たちの夢を修正する努力を続けて行くつもりです。多くの傷あとがなお生々しいので、これは容易なことではなく、遥かなる道標なのですが・・・」。

パレスチナの甲鐘

1948年4月9日、金曜日。カデル・フセイニの死が伝えられると、エルサレムのアラブ人

地区では商店は一斉に店を閉じ、交通が途絶えた。ヤッファでは教会の鐘が鳴り響き、アラブ人の悲しみがパレスチナ全土に広がった。カデルの葬儀が営まれ、弔砲が轟く中、遺体は棺とともに、フセイニ家の先祖が眠るハラム・アルシャリーフに埋葬された。葬儀に参列するためアラブの兵士多数がカステルから撤収、結局、カステルはユダヤ側に占領された。指導者を失ったアラブ側「戦術的な過ち」（アラブ紙「ファラステイン」）を犯したわけだが、カデルの死によってアラブ側の部隊は士気喪失し、彼から個人的な影響を受けていた多くの兵士たちは自分たちの村々に帰ってしまった。また、カデルとともにアミン・フセイニのパレスチナ・アラブ軍を支えていたヤッファ地区司令官ハッサン・サラメもダマスカスの「アラブ最高委員会」と対立して辞任、パレスチナを去った。カデルとサラメの相次ぐ退場によってアラブ軍を指揮するパレスチナの司令官はほとんどいなくなってしまった。アラブの新聞は「カデルの後に長男ファイサルら4人の遺児が残された」と弔辞を送った。死の直前、カデルはダマスカスにいる妻のワジーハ夫人そして長男ファイサルら4人の子供たちに詩を同封した手紙を送った。これが家族にあてた遺書になった。

「勇気ある人々の土地
われらの父祖の土地
この土地に
ユダヤ人たちには 何の権利もない
どうしてわれは眠れようか
そこに敵がいるというのに
わが心 何か熱く燃えている
わが祖国が私を呼んでいる」

「親愛なるワジーハへ

われわれは 歴史に偉大で輝かしいページを書いた。これは決して生易しいことではなく、日夜、大きな犠牲と努力を要した。誰しも行動の最中では、自分自身を、親戚を、息子たちを、寝食を忘れるものです。敵は手強

4) Larry Collins, Dominique Lapierre, *O JERUSALEM!*, GRAFON BOOKS, LONDON, 1982.P.255.

いが、我々は最後の勝利を手にするでしょう。インシャア アッラー（神のご加護を）」⁴⁾

カデルの死後、カステルのアラブ人村はユダヤ側の手に落ちた。のちにイスラエルはカステルの戦場址に建立した記念碑にこう記している。

「アラブ側は壊滅的な打撃を被り、エルサレムの包囲網は解かれた。三百五十三台の車両から成る3つの輸送隊が補給品や武器類を積み込み、孤立して苦境に陥っていた（10万人のユダヤ人が待つ）エルサレムへ搬入することに成功した・・・」。

こうしてユダヤ側はパレスチナの内戦（1947年11月～48年5月）に勝利し、その後のイスラエル独立戦争（48年5月～49年2月）を経てユダヤ国家独立への道が切り開かれた。これに対し、パレスチナ側は、1948年のイスラエル建国によって「ナクバ=大破局」と呼ばれる民族の悲劇に見舞われる。パレスチナ人の国と想定された「アラブ国家」は誕生せず、ヨルダン川西岸地区はイスラエルと戦った隣国ヨルダンに併合され（1950年）、ガザ地区もエジプトの統治下に置かれ、このあと19年後の第三次中東戦争で西岸、エルサレムとともにイスラエルに占領され、パレスチナの存在が世界の人々の目から見えなくなった。戦火を追われて難民となりヨルダンに逃れたパレスチナ人はヨルダン国籍を、またイスラエルに残ったパレスチナ人はイスラエル国籍をそれぞれ取得、そしてパレスチナを追われて難民となった70-75万人と言われるパレスチナ人は帰るべき土地や家屋を失い、「祖国を持たない」新たなディアスポラ（流浪）の民となった。

志半ばで倒れた父の遺志 長男ファイサルへ

カデルの死後、フセイニ家は多難な道を歩んだ。フセイニ家は歴代のエルサレム市長を勤めるなどパレスチナを代表する名門だが、エルサレムのムフティを務めたハッジ・アミン・フセイニら数多くの指導者を輩出、ナシャシビ家とともにパレスチナの政治生活を支配していた。カデルの遺子4人のうち長男ファイサルは8歳の時、バグダッドで父の死を知

らされた。翌49年、のちにPLO議長となるヤセル・アラファトと初めて出会った。当時、アラファトはカイロのパレスチナ学生総同盟（GLPS）代表として活躍しており、二人はカイロなどでよく会い、親交を深めた。1929年にパレスチナで生まれたアラファトは17歳の時、カデルの個人秘書を務め、ファイサルとは親類関係にある。

その後、1967年の第三次中東戦争でヨルダン川西岸とガザ地区がイスラエルの占領下に入ると、ファイサルはエルサレムに残したフセイニ家の資産を管理するためパレスチナに戻った。ところが、エルサレムの自宅で短機関銃2挺が発見されたためイスラエル当局に逮捕され、67年から68年にかけて1年間投獄された。この事件を契機にファイサルは武力活動とはいっさい縁を絶ち、政治活動に専念するようになる。イスラエル側の平和団体と協力しながら抗議行動やイスラエル人との対話集会などの平和集会運動を展開、80年に東エルサレムにパレスチナ調査研究・機関「アラブ研究センター」を開設し、イスラエルの占領に反対する地元パレスチナ側の政治指導者として頭角を現した。だが、再びファイサルは逮捕される。

「インティファダ」のニューリーダーに — 「独立宣言」に動く

1988年7月、ファイサルは半年前（1987年12月）に勃発したパレスチナ住民の反イスラエル・占領闘争（インティファダ=アラビア語、原義はひっくり返す、蜂起の意味）を幫助した罪でネタニアに近いクファルヨナ刑務所に送られた。7月31日未明、ファイサルの主宰するアラブ研究センターで「パレスチナ独立国家宣言」草案が発見され、イスラエル当局に押収されたからだ。この文書は、押収したイスラエル警察を通じて国内治安機関シンベトに回され、直ちに解読された結果、占領地のパレスチナ地下指導部がパレスチナ独立宣言を起草していたという驚くべき事実が判明した。この「独立宣言」文書によると一、

(1) パレスチナ国家は、1947年11月の国連総会決議181号に基づく「アラブ国家」

を領域とする。

- (2) 国家元首アラファトPLO議長、外相カドゥミ政治局長、ハバシュ・パレスチナ解放戦線 (PFLP) 議長とハワトメ・パレスチナ民主解放戦線 (DFLP) 書記長も入閣
- (3) 暫定政権を樹立し、イスラエルとの最終合意を目指す和平交渉に参加するパレスチナ代表団を組織する
- (4) パレスチナ国家の暫定議会は西岸・ガザに住むパレスチナ人150人から成り、現存のパレスチナ民族評議会 (PNC) メンバーとともに新国家の議会を構成する。主なメンバーとしてファイサル・フセイニ、エリアス・フレイジ・ベツレヘム市長、シャカー前ナブルス市長らが名を連ねる

ファイサルによると、押収された文書は4通で、いずれも「パレスチナ独立国家宣言」と題され、三通は英語、1通はアラビア語で書かれている。英語版は米国在住ユダヤ人学者ジェローム・セーガル博士と性が・ガザ在住のパレスチナ人、アラビア語版は西岸・ガザ在住のパレスチナ人が作成した。ファイサルは、これらの文書はインティファダを指導するPLO系の秘密地下組織「占領地闘争民族統一指導部」(UNLU) から回されてきた者で、断じて自分の提案ではないと主張しているが、イスラエル側はファイサル自身の作成と見ている。

ファイサルは89年1月29日、6ヶ月ぶりに自由の身となったが、獄中にあっても当時のラビン国防相 (労働党) の側近シュミエル・ゴレン、出獄後もペレス首相代行兼蔵相 (労働党) の側近良し・ベイリン国会議員、ニムドロ・ノビックらと会うなど、イスラエル側とパレスチナ側とのパイプ役に当たった。また、米国とのチャンネルも維持し、この年の8月三日、エルサレムの米国領事館でジョン・ケリー国務次官補 (中東・南アジア担当) と2時間にわたって意見交換した。之には、他の西岸・ガザのパレスチナ人指導者も多数同席した。この席でファイサルは、パレスチナ国家の樹立、イスラエルの占領地撤退実現のた

め米国の圧力行使、中東和平国際会議開催などを要請した。しかし、インティファダが長期化するにつれて、ファイサルに対してイスラエル当局は監視の目を厳しくするようになった。占領地にファイサルが姿を現すと、インティファダが激化するため、イスラエル当局は89年12月、彼に占領地への立ち入りを6ヶ月間禁止した。エルサレム市内では、ファイサルの逮捕に1万ドルを提供するという右翼の張り出したポスターが街頭に見られるようになった。

ファイサル家を訪ねて

筆者は89年7月9日、ファイサル・フセイニ家の昼食に招かれた。エルサレムのオリーブ山へ向かう道を抜けると、丘陵地帯の一角に瀟洒な門構えの白い建物が目に入った。東エルサレムのアルスワーニーにあるイブ・ギミヤ大学のすぐ隣りだ。ファイサル家はナジャト夫人、長男アブデル・カデル (1972年生まれ)、長女ファドワ (1974年生まれ) の4人家族。「この家は借家で、もともとは東エルサレム市内にあったのですが、イスラエルから立ち退きを求められ、ここに仮住まいしているのです」とナジャト夫人。室内は質素な たたずまいだが、居間にはカデル・フセイニの肖像画が飾ってある。ナジャト夫人は「ファイサルと私はいとこ同士。若い頃からいろんなことがありましたが、夫が逮捕、拘禁され、イスラエルの刑務所に入れられていた時、夫の下着類などを持って差し入れのため刑務所通いをした経験が忘れられません」と家族の歩んできた道を振り返る。「でも、私たちの苦労も、長い間難民キャンプに住んでいる多数のパレスチナ人の厳しい生活に比べたら、物の数ではありません。家族に食べ物があったら、その分を難民の人たちに分けてあげたいです」。日本からの贈り物ですとソニー製小型ラジオ2台と煎餅を差し出したところ、「そのジャバニーズクラッカーはいただきませんが、ラジオのほうは、きょう難民キャンプから我が家に来ている二人の少年にやってください」との返事。

こうした会話を通じて、筆者はパレスチナ

人指導者の家族として、誇りと尊厳、挾持、さらには慈母のような一面が伺えたような気がした。祖父の名前を付けた長男アブデル・カデル君は高校2年生（当時）、自宅から16キロ離れたラマラ高校にバスで通学しているが、インティファダが始まって以来、学校は閉鎖されたまま。「僕は物理など理工系の学科が好きなので、将来は米国に留学してこの方面の勉強をしたい」。

ファイサルとの対話

－ 「パレスチナ国家」への道標

ファイサル・フセインに会って、アラファトと同じような印象を抱いた。握手した手の柔らかさ、もの静かな物腰、落ち着いた口調。朴訥な語り口だが、質問には本質を突いて答えてくれる。他の人間への心配りも相当感じられた。一緒に食事中にも、食べ物や飲み物を自ら運び、客にお代わりを勧めるなどきめ細かな神経を使う。彼との対話中にも来客や電話が次々に入り、秘書のガドワ嬢もててこ舞いの様子だった。筆者はまず、インティファダについて尋ねた。

－ インティファダとは何でしょうか。

ファイサル - 「インティファダとは、パレスチナ民族が独立国家の建設へ向けて自分たちの社会を再編し、立て直す運動です。これは、単なる投石やデモが目的の運動ではありません。インティファダは、明確な政治目標を達成するための手段なのです。この目的が実現しつつありと判断された時、投石は止むのです。それは、適切な時期に取り得る政治的な決定になるでしょう。またインティファダは、行動の転換を示し、イスラエルの占領地にパレスチナ民族のアイデンティティを確立するものです。地元パレスチナ住民間の新しい協力関係を作り出し、イスラエルの占領者に立ち向かうための闘争手段でも

あるのです」。

－ インティファダによってパレスチナ社会はどう変わったのですか。

ファイサル - 「インティファダが始まった時、私はイスラエルの刑務所に入っていました。88年7月に再び逮捕され、6ヶ月後に出所しました。こういう経過を歩んで来たので、私はパレスチナ人しゃかいの変わりようをつぶさに実感できます。大きく変わったのは、パレスチナ人がお互いに助け合い、彼ら自身の手で生活を支え合うという自主・自立の精神が高まったことです。互助、自立の精神が育まれた頃で、パレスチナ人社会は前進したと思います。以前はこういうムードは存在しなかった。また、パレスチナ人の人々の考え方や身の処し方も変わって来ました」。

－ インティファダはどういうグループが指導しているのですか。

ファイサル - 「インティファダの指導部はPLOの指導部そのものです。PLOが本部の役割を担い、インティファダを指導する民族統一指導部（UNLU）はPLOの地方指導部という形になっています。確かに私たちが占領地である現地指導部を形成し、インティファダを指導、今後の方針を決定しているのは時事値ですが、でもそれは、インティファダの戦術面での決定に過ぎず、基本政策面での戦略はチェニスのPLO本部が策定しています。UNLUはPLOの基本戦略の中でインティファダの政策を決め、これを具体的に実践し、運動を展開しているのです」⁵⁾。

－ あなたはどのような役割を担っているのですか。

ファイサル - 「私たち占領地に住むパレスチナ人の中には、ネルソン・マンデラのような人物は沢山いるが、私も含めて誰かがPLOに代わるパレスチナ指導部の代表になれるとは考えられません。もしイスラエルが交渉を

5) インティファダを指導する民族統一指導部（UNLU）は、PLO傘下のファタハ、PFLP、DFLP、パレスチナ共産党の4派で構成され、下部組織としてシェビーバ（青年組織）、パレスチナ労働女性民族同盟などが各地で活動。UNLUが具体的な闘争戦術を練り上げ、ゼネス

トやデモの指令をリーフレットなどを通じて伝達、下部組織は各地に草の根レベルの「人民委員会」を組織して福祉、教育、医療から野菜の栽培に至るまでほとんどの日常活動を担当、イスラエルの占領行政を代替し、占領態勢の支配構造を突き崩そうとしている。

望むなら、PLOを相手にすべきです。私の使命は、できるだけ多くのイスラエル人に対して、平和を見いだす唯一の道は、PLOを交渉の場に招待すること以外に無いと伝えることです。このために、私は、会議、集会などで多くの人と話し合うつもりです」。

－ インテッファダがイスラエル社会にどのような影響を及ぼすと思いますか。

ファイサル - 「もしイスラエル政府に私たち西岸・ガザの指導者と話し合う考えがあるなら、私たちを単なる占領地の住民と見なす態度を改め、私たちを一つの民族として認めるべきです。私たちを一つの民族として認めるなら、私たちはイスラエル政府の提案する和平案について話し合う用意があります。イスラエルが強硬路線に突き進んでいくのか、それとも、これとは別の方向に転換し、パレスチナ人との間で対等の立場に立脚した和平への道を選択するのか、もし後者の道を選ぶなら、民主主義を信奉するイスラエルの指導者には大きな勇気が求められます。だが、真の指導者とは、自国民に対し国民が聞きたいことを言うだけでなく、国民は何を聞かなければならないかを率直に言える人です。残念ながら、不幸にも、現在のイスラエル指導者の大半は国民が耳に入れたいことだけを言っています」。

－ パレスチナ社会の内部にも、イスラエルのように和平を拒否する勢力が存在するのではないですか。

ファイサル - 「イスラエルとの共存をめざす和平路線を巡っては、二つのパレスチナ勢力が存在します。一つは、PLO内部の野党勢力で、この路線を批判しながらも、PLOの指導、決定には従う立場です。もう一つは、この和平を目指す共存路線を拒否し、PLOの枠外にいるパレスチナ勢力です」。

－ インテッファダはアラブ世界にどのようなインパクトを与えますか。

ファイサル - 「インテッファダはアラブ世界に計り知れないほどのインパクトを及ぼすと思います。アラブの民衆が当局に異議申し立てを行うことを決意、決起し、実際の行動に踏み切った場合、たとえアラブの民衆が

当局による強い力に出会ったとしても、強い決意と投石の力によってそうした行動を起こすことが可能であることを、インテッファダは教えたのです。

アラブの体制側にとって、自国の民衆の抗議行動を引き起こすような政策の変更を迫られる〈赤信号〉をインテッファダから受け取ったのです。第二、第三のインテッファダがアラブ各国に波及する事態を避けるために、やがて自国の抑圧的な政策の変更を迫られると思います」。

「パレスチナ国家」の青写真

－ インテッファダの成果をあげてください。

ファイサル - 「インテッファダの成果は4つあります。まず第一には、ヨルダンのフセイン国王（当時）が半年後の88年7月に西岸分離を宣言し、西岸に対するヨルダンの主権を放棄したことです。ヨルダンは西岸の住民を支配できないことを悟り、パレスチナ人が民族自決権を行使し、私たちが国家を手に入れることの正当性がインテッファダによって立証されたのです。第二には、アラブ世界が今や、イスラエルとの共存をめざすPLOの和平イニシアチブを支持していることです。第三には、欧州も89年6月のマドリード出の首脳会議でPLOの和平路線を支持し、パレスチナ人の民族自決権を確認する重要な宣言を発表し、PLOの和平イニシアチブを強くバックアップしていることです。そして第4には、米国も88年12月にPLOとの対話を始め、対パレスチナ政策に大きな変化が生じていることです。米国のペーカー国務長官（当時）が88年5月の演説で表明したように、イスラエルとPLOに働きかけて双方に歩み寄りを期待しているのです」。

－ 最後に、「パレスチナ国家」の青写真を描いてください。

ファイサル - 「パレスチナ国家の新領土は東エルサレムを含む西岸とガザ地区です。1967年の第三次中東戦争でイスラエルの占領下に入ったパレスチナの版図です。パレスチナの外にいる難民の帰還では、新国家に領域

内に戻って来ることに問題はありますが、イスラエル領内への帰還については、2つの選択肢が考えられます。イスラエルからパレスチナ人の資産に対する何らかの補償をモトメルケースと、実際にイスラエルに戻るケースです。いずれにせよ、難民の帰還、国境の確定、エルサレムの地位、水利、ユダヤ人入植地などはすべて来たるべき和平交渉の場で解決されるべき争点です。この地域の域内協力がうまく進めば、パレスチナ国家も経済的に十分遣っていけます。21世紀に、各国間の協力が一層進展し、パレスチナのような小国もこれにうまく加わっていけば、確固たる経済基盤を構築することがかのうだと確信しています。

ファイサルから日本人へ

ファイサルは、2日間合わせて三時間半に及んだ筆者のインタビューを終えると、「日本の人々に今、占領地で何が起きているのか、インティファダの真実を正確に伝えてください。インティファダはここに住むすべてのパレスチナ人にとって将来への道しるべ道標なおですから」と訴えた。

森戸 - 「私自身、占領地に短期間滞在しただけでインティファダの真実を理解できなかったかもしれません。ヘブロンファウル難民キャンプを訪れた時、キャンプの壁に赤字で書かれた次のような落書きが目にとまりました。

『私の兄弟、友人たちは刑務所につながれている。私は彼らの刑務所の中に私たちパレスチナ人が求めている真の自由を見いだす』

ここに表現されたパレスチナ人の連帯感とは人間としてのアイデンティティの広がりを示すものであり、インティファダを推進するバックボーンになっていると思います。あなたが言うように、インティファダによって、パレスチナの人々の考え方が変わり、今まで占領下のパレスチナ人社会になかった互恵・自立の精神が生まれたのだと思います。このパレスチナに吹き始めた新しい動きが今後、どう結実していくのか、日本に帰ってからもうじっくりと見守り、考えていきたい」。

ファイサル 突然の死

筆者はその後、2001年8月に東エルサレムにあるファサル・フセイニ家を再訪した。前年秋、再びインティファダが再燃し、パレスチナ住民による民衆蜂起が各地に広がっていた。最初のインティファダでファイサルはイスラエルの過酷な長期占領を世界に訴えるため、西岸・ガザ住民に非暴力・不服従運動を呼びかけた。イスラエル兵の銃撃には投石・デモ戦術で王子、あくまでも武器を用いない平和的な「非暴力・反占領抵抗運動」を貫いた。この意味でファイサルは、父親のカデルと同じパレスチナ独立の目標を目指しながら、明らかに武闘に邁進した父親とは別の道を歩んだ。パレスチナ人の暮らす西岸・ガザに国を造り、隣りのイスラエル国家と平和的に共存する「二国家共存」を推進、このファイサルのメッセージは、パレスチナの若者がイスラエル兵に投石する映像とともに世界中に発信された。やがてこのインティファダの成果はパレスチナ海保運動のその後の流れを形成していった。

そして2000年9月に再燃した第二次インティファダでも、独立闘争と位置付けて東エルサレムにある「オリエンハウス」を拠点に活躍、次世代のパレスチナ指導者として絶大な期待と人気を博していた。ところが、2001年5月、湾岸戦争以来パレスチナとの関係が悪化していたクウェートを訪問中、突然の心臓発作に襲われ、同月31日、帰らぬ人となってしまった。長男のアブデル・カデルさんは「父は数日の旅行と言っていたのに、こんなことになるとは本当に残念です。父は、パレスチナ民族としての誇りと勇気を持って生きた人でした。たとえ敵に殺されることがあっても、自分の顔を高く胸を張って、自分を殺す相手の目をじっと見詰めて死ぬことだ、といつも言っていました」と、志半ばで倒れた父親の死を悼む。

ファイサル・フセイニの遺体はクウェートから東エルサレムへ移され、6月初め、彼の死を悼む数千人の住民に見守られながら、旧市街のアルアクサ・モスクの近くにあるフセイニ家の墓地に、父アブデル・カデルの隣り

に埋葬された。彼の突然の死は、ある意味で新・旧インティファダの主役の交代を象徴していると言えるかもしれない。というのは、第二次インティファダは、イスラエルとの武力闘争を通してパレスチナ解放実現を叫ぶ武闘派のイスラム原理主義組織「ハマス HAMAS=イスラム抵抗運動の略」が主役として台頭して来たからだ。対決から対話へ、そしてまた対決へ。パレスチナを舞台に主役を変えながらも幾次に及ぶ戦争を繰り広げる中東百年紛争には、これからいったいどのような決着の道が用意されているのだろうか。

(次回は、第6章「パレスチナ－土地所有の歴史」、第7章「ユダヤ人入植の歴史」。参考文献は最終回に一括掲載)